

# ウォーカブルの本質を捉えるための10冊

多義性を理解し、多様性を容認するまちづくりを実現していくためにも、  
真のウォーカブルを追求するべきではないでしょうか。  
今号の特集の理解を深める10冊を紹介します。



## 6 『生きてきた景観マネジメント』

「生きてきた景観」とは、景観を成立させているさまざまな環境の変化を受けながらも、「いまも生き生きとある都市やまち、場所を物語る景観」のこと。御堂筋(2頁)や富山「グランドプラザ」(8頁)など豊富な事例をとり上げ、観察者・参加者も関与する能動的な生きてきた景観づくりへの視座・実践・提案を紹介する本書は、「歩いて楽しむ」空間を創りだすためのアイデアに満ちている。

日本建築学会=編  
鹿島出版会/2021年



## 7 『新版 アメリカ大都市の死と生』

内田氏(14頁)もあげた、現代都市問題の告発者の主著。1961年の原著刊行当時、アメリカ諸都市で進められていたスクラップ&ビルド型の再開発と都市計画がまちを衰退させていると指摘。その提言はまたたく間にセンセーションを巻き起こした。本書以降、都市論は、住民の社会的行動や経済活動抜きには語れないものとされた点で、今日のウォーカブルのひとつの出発点と言える。

ジェイン・ジェイコブズ=著 山形浩生=訳  
鹿島出版会/2010年



## 8 『ニューヨークのパブリックスペース・ムーブメント — 公共空間からの都市改革』

内田氏(14頁)が“偉大な例外”と呼ぶほどウォーカブルな都市、ニューヨーク。本書は、その公共空間の歴史、空間再編の具体事例、組織・マネジメントを詳細に論じる。公園・水辺・ストリート・公開空地の再編、多様なプレイヤーが共創する制度・組織の設計など、公共空間から人と都市の関係性を再構築する試みは、なんとも刺激的だ。

中島直人=編著  
学芸出版社/2024年



## 9 『ウォーカブルシティ入門 — 10のステップでつくる歩きたくなるまちなか』

著者は、内田氏(14頁)も名前をあげたアメリカにおけるウォーカブルの第一人者。ウォーカブルこそが、現代都市における経済・健康・環境問題解決への重要な要素と説き、基本的な考え方を事例とともに整理する。その実現への「4つの条件」を踏まえ、10のステップで論じた内容は、日本での展開を構想する際にもおおいに役に立つ。

ジェフ・スペック=著 松浦健治郎=監訳  
学芸出版社/2022年



## 10 『フェミニスト・シティ』

男性基準で計画された都市空間でのインターセクショナリティの問題を鋭く論じ、大きな話題を呼んだ本。関村氏の論考(20頁)も、本書が土台にある。なぜベビーカーは電車に乗せづらいか、女性たちが暗い夜道を避けて遠回りしなければならない理由は何かなど、身近な疑問を出発点に、誰もが安心・安全に楽しく歩ける都市の条件を考える内容は、新鮮な驚きと発見に満ちている。

レスリー・カーン=著 東辻賢治郎=訳  
晶文社/2022年



## 1 『復刻版 日本の広場』

ヨーロッパ的な「広場」がないとされる日本において、古くは一揆や祭り、日常の洗濯場や井戸、近代ではデモや集会など、自然発生的に形成されてきた日本独特の「広場」の歩みを考究する名著。1971年の初版時、最先端の論客が全国を実測調査し、図面と写真でまとめた内容は、富山「グランドプラザ」(8頁)でもふれたウォーカブルの核としての広場の価値を再認識させる。

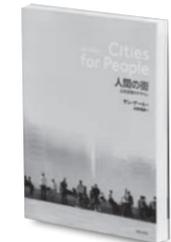
都市デザイン研究体=編著  
彰国社/2009年



## 2 『人間の街 — 公共空間のデザイン』

現代における都市デザインの第一人者、ヤン・ゲールの著作。「街の主役は人間である」と説き、長年の調査に基づいたデータや、世界の都市写真を豊富に紹介しつつ、公共空間のデザインに必要な考え方とその方法論を提示する。ウォーカブルの肝となる“人中心の空間”とは具体的にどのようなものなのか、そのひとつの「解」となる良書。

ヤン・ゲール=著 北原理雄=訳  
鹿島出版会/2014年



## 3 『新クリエイティブ資本論 — 才能が経済と都市の主役となる』

国土交通省の「都市の多様性とイノベーションの創出に関する懇談会」(32頁)でも言及された書。新時代の経済を牽引するクリエイティブ・クラスの実態と彼らが集まる都市を論じており、どのような人を念頭にまちづくりすべきか参考になる。また、社会階層の格差を悲観しすぎず、人は誰もがクリエイティブなのだ捉える視点も重要だ。

リチャード・フロリダ=著 井口典夫=訳  
ダイヤモンド社/2014年



## 4 『都市のイメージ 新装版』

旧版(1968年)の刊行以来、半世紀以上読み継がれてきた都市計画・デザインの基本図書。都市は人にイメージされるものであり、その可能性を高めることが美しく楽しい環境には重要と説く。「五感」に強く訴えるまちの姿を創り出すことを目標に、都市をアイデンティティとストラクチャーという物理的特性から分析する内容は、ウォーカブルを捉え直すためにも良い指針となる。

ケヴィン・リンチ=著 丹下健三、富田玲子=訳  
岩波書店/2007年



## 5 『福祉のまちづくり その思想と展開 — 障害当事者との共生に向けて』

著者は長年にわたり日本のまち・建築のユニバーサルデザインの研究を続け、さいたま新都心のバリアフリー整備にも関わった人物。1970年前後の「福祉のためのまちづくり」運動や、2006年バリアフリー法の施行などの歴史を丁寧に紐解きながら、日本型インクルーシブ社会での設計者・建築家の役割、また課題についても論じる。

高橋儀平=著  
彰国社/2019年

